

普通のOLがトリップしたら
どうなる、こうなる2

サイラス・メルバーン・ロンバート(メル)

大国セフィードの王。
'死神陛下'とも呼ばれる。
偵察のために向かった
ブランシャール国で
セイラを見初め、求婚した。

マグワイア

近衛隊副隊長。
年若きエリートだが、
口調が軽い。

ウォーレン

冷静沈着な近衛隊長。
以前はメルの影武者を
していた。

レオンハルト

ブランシャール国の王太子。
叔父との王権争いに勝利し、
戴冠式を控えている。

フローレス

メルの妃候補の一人。
宰相の孫娘。
他の妃候補と違い、
セイラに優しく接する。

ジャクリーン

メルの妃候補の一人。
侯爵令嬢。美人で
気が強く、正妃の座を
狙っている。

せら
世良綾子(セイラ)

突然、異世界にトリップしたOL。
宿屋で働いていたが、メルと
婚約したことで、大国の妃候補に
なってしまう—!?

目次

第一章 偽りの身分

7

第二章 闇を光に変えて

132

第一章 偽りの身分

「私、異世界出身なんです」

まさか自分が二十八歳にもなつて、こんなファンタジーなセリフを口にする日が来るとは、夢にも思っていなかった。

だが事実なので仕方がない。私、世良綾子が今住んでいるのは、日本でもアメリカでもフランスでもない。それどころか、地球ですらない異世界なのだ。

ごくごく平凡な、どこにでもいるOLだった私は、ある日目覚めたら見知らぬ森にいた。異世界トリップを夢見たことはないし、怪しげな魔法陣を床に描いた覚えもない。それなのに、婚約者と親友、それに家族をあちらの世界に残し、たった一人でこちらの世界に来てしまったのだ。相棒は、そのとき握りしめていた携帯だけ。異世界に来てからはなぜか電池が減らなくなったものの、電波のない世界ではほとんど役に立たなかった。

こちらの世界へ来てしまった理由は不明。元の世界への帰り方も不明。

これはもう詰んだな……そう思って諦めかけたが、捨てる神あれば拾う神ありだ。近くの村で宿屋を営む夫婦に助けられ、この世界でなんとか生きていけるだけの知識も得られた。

こうして私は、ブランシャールという国で、宿屋の看板娘として働きながら暮らしていた。ちなみにこの世界では、『セイラ』と呼ばれている。というのも、最初に名を聞かれたとき名字の『世良』だけを名乗ったのだが、こちらの人たちにとっては、そのままだと発音しにくいらしい。そんなある日、宿屋を訪れた一人の旅人と恋に落ち、出会って間もないうちに婚約までしてしまった。その婚約者が、私の想像を遥かに超えた大物だったのだ。

——サイラス・メルバーン・ロンバート。

そのいかにも大仰な名前を持つ彼は、なんと大国セフィラードの国王陛下だった！

これがおとぎ話なら多少の紆余曲折はありつつも、たったの数ページで結婚まで漕ぎつけ『めでたし、めでたし』となるものだが、現実はなかなか上手くいかない。

村を出て彼——メルさんの城へやって来たのだが、そこは王妃や愛妾の座を狙う者たちが住まう伏魔殿だった。私は婚約者であることを秘密にしていたのだが、メルさんが直々に連れ帰った私を良く思わない誰かから、二度も命を狙われた。

一度目は毒殺未遂だったが、二度目の暗殺未遂はプロの暗殺者まで雇われた大掛かりなものだった。

暗殺者のリーダーは捕らえられたものの、気を抜ける状況ではない。何しろその男は未だ口を割らず、彼らの雇い主——つまり私を殺そうとした黒幕の正体は、わかっていないのだから。

その男は城の地下牢で、連日厳しい取り調べを受けている。

また黒幕と疑われている人物たち——王妃候補筆頭であったジャクリーン・ゲインズ侯爵令嬢と

三人の伯爵令嬢たちは、城内で軟禁されている。

『薄色の間』と呼ばれる、国王の愛妾たちが住まう部屋。それらが集まる一角から出ることも、また外部と連絡を取ることすら許されていないそうだ。

二度目の事件のあと、黒幕はすっかりなりを潜めているため、私はセフィラードに来て以来、もつとも平和で幸せな日々を過ごしている。

ずっと一人で抱え込んでいた『異世界人である』という秘密も、メルさんにやっと打ち明けることができた。心配していたような拒絶反応は一切なく、メルさんの懐の深さを思い知らされた。

暗殺事件の最中に、私はメルさんの婚約者であると、自ら公表してしまった。よって二人の関係を隠す必要もなくなったので、彼と会える時間がぐんと増えて喜んでいたので……

——甘い蜜には、虫が寄って来るもの。

私が婚約者だとばれた途端、周りにうるさい羽虫——『セイラ派』を名乗り、私に媚を売る貴族が群がってきたのである。

1 穏やかな日々

「いやあ、セイラ様はあの陛下に寵愛されておられるとか。全くめでたいことすなあ。困ったことがありましたら、何でもこの私にご相談ください」

「いやいや、卿では無理でしょう。特にファッションのこととなると、壊滅的にセンスが悪い。もしドレス選びでお困りでしたら、是非私にご相談を。間違っても、その男を頼ってはいけませんよ？」

城の一階にある大ギャラリー。そこで壁際の椅子に座っている私を取り囲むように立っている、三人の貴族。その中の二名が口論を始めたところで、残りの一人がチャンスとばかりに私に一步步み寄る。クルンとした口ひげを生やしたその男性は、ピンポン玉ほどもある真つ赤な宝石がついたネックレスを手にかけていた。

「セイラ様、これは遠い異国から取り寄せた珍しい宝石にございます。実は陛下に折入ってご相談がありまして……セイラ様にお口添えいただけるのでしたら、もつと希少な宝飾品をお贈りすることもできるのですが……」

未だ言い合う二人に聞かれぬよう、ひそひそと囁く口ひげ貴族。

このようなごますりや袖の下は、日常茶飯事だった。

しかし貴族たちの変わり身の早さには、ほとほと呆れる。私がメルさんの婚約者だと知る前は、敵意しか向けてこなかったくせに。

だが下手な対応をしてプライドを傷つけでもしたら、恨まれて足元をすくわれかねない。できる限り、波風を立てないのが賢明だろう。

「嫌ですわ、皆様。そのように親切にしないでいただいても、何もお返しできそうにありません。申し訳ないので、お気持ちだけいただいておりますわね」

私はレースの扇で口元を隠して、淑女らしく微笑んだ。そのあと、差し出されたネックレスに視線を向ける。

「それにしても、何て素敵なネックレスなんでしょう」

「そうでしょうそうでしょう！ どうぞ、お受け取りください。よろしければ、わたくしめがお付けて差し上げます」

口ひげ貴族はしめしめとばかりに笑みを浮かべながら、私の背後に回る。他の二人は、それを不愉快そうに見つめていた。

大きめに開いたドレスの胸元に、見事な煌めきを放つネックレスが当てられたとき、私は独り言みたいに呟いた。

「でも……きつと陛下はすぐお怒りになるわね」

その言葉を聞いて、金具を留めようとしていた男の手がビクリと震えた。

「陛下以外の男性からいただいた宝石を身につけるなんて。ああ見えて陛下は独占欲の強い方だから、嫉妬なさに違いないわ」

男の手からネックレスがスルリとこぼれ、硬質な音を立てて床に落下する。

「あら、どうなさいましたの？」

私が笑みを浮かべて振り向くと、男は青褪め、その手は小刻みに震えていた。

彼は私の足元に落ちたネックレスを、油の切れたロボットのようなギクシャクした動きで何とか拾い上げる。

「セ、セイラ様、申し訳ございません。緊張のあまり手が滑ってしまいました。あ、ああ、宝石に傷が！　こんな、物を、セイラ様にお渡しするわけには、参りませんので、これは、あの、持ち帰らせていただきます!!」

額に脂汗を滲ませた男は、どこも傷ついた様子のないネックレスを隠すように握り込むと、脱兎のごとく駆け出した。

私はその後ろ姿を見送りながら、扇で口元を隠してニンマリと笑う。

——この一件が広まって、バカみたいに貢ぎ物を持つてくる貴族が少しは減るといいんだけど。近頃、宝石やドレス、果ては湖で遊ぶための船といった高価な貢ぎ物が増え、手に負えなくなっていた。すでに自室には入りきららず、貢ぎ物専用の部屋があるほどだ。

「あら、あの方どうされたのかしら？　突然青い顔をして……お腹の調子でも悪かったのかしらね」

無邪気に微笑んだ私に、引き攣った笑顔で相槌を打つ二人の貴族たち。心なしか先程よりも、彼らとの間に距離を感じる。

そのとき、艶のある低い声で名前を呼ばれた。

「セイラ」

振り向かなくてもわかる。今この城で、私のことを呼び捨てにできるのはただ一人。それに……愛する人の声を、誰が聞き違えるものか。

「陛下！」

私は振り向き、満面の笑みで呼びかけた。

すると陛下——メルさんも、蕩けるような笑みを浮かべる。

「セイラ、こんなところにいたのか。部屋にいないので探したぞ」

彼の長い指が私に向かって伸ばされ、頬をゆっくりとなぞられる。

「それに、何度も言っているだろう。俺のことはサイラスと呼べと」

「はい、陛下。……いえ、サイラス様」

甘く濃密な雰囲気を作り出す私たちの傍らで、貴族たちは啞然とし、立ち去ることも忘れて固まっている。きっと彼らの頭の中は、『これは一体誰だ？』『本当にあの陛下なのか？』なんて考えで一杯なのだろう。

だが、それも無理のないこと。

人々から『死神陛下』と恐れられるメルさんの、こんな優しげな顔など見たことがないだろうから。

そのメルさんは笑顔から一転、『死神』らしい酷薄な表情で、彼らを睨みつける。

「何の用だ？　用がない者は早々に立ち去れ」

一段と低い声で吐き出された言葉は、叱責というよりもむしろ恫喝に近かった。

貴族たちは一瞬にして青褪め、口ひげ貴族に負けない速さでその場から消える。私たちの様子を遠巻きに見ていた者たちも、メルさんから視線を向けられた途端、クモの子を散らすように逃げていった。

メルさんはそんな彼らの後ろ姿を、実に愉しそうに見ている。

「こんなもんでいいだろう？」

そう言つて、彼は満足げに笑つた。貴族たちを硬直させた、あの甘々な笑みはずではない。急に雰囲気を変えたメルさんに、私は驚かなかつた。

——なぜなら、あれは演技だつただから。

あまりにしつこい取り巻き予備軍を平和的に一掃するため、私はメルさんと話し合い、ひと芝居打つことにした——その名も、『害虫駆除大作戦』だ。

メルさんは私が日々物を貢がれていることを知つても、もらえる物はもらつておけと言つて笑つていた。

だが、堪りかねた私が貴族たちのことを相談したとき、彼は人の悪い笑みを浮かべてこう言つた。「婚約者の俺でさえ、忙しくてなかなか会えないというのに……仕事らしい仕事もせずセイラに纏わりついている奴らを見ていて、俺もそろそろ限界だつたんだ」と。

私が常に男性に囲まれているのを見て、少々考えが変わつたらしい。

そんな私たちが用意した台本は、いたつてシンプル。

まずは私を取り巻きを引き連れ、ホールやギャラリーといった人の多い場所へ行く。

おだてられたら嬉しそうに笑つて見せ、ワイロを渡されても満更でもないふりをする。

そしてメルさんが偶然通りかかつた風を装つて私たちの前に現れ、不快感を露わにするという単純なものだつた。

逃げていく貴族を見送つたメルさんが、こちらを見る。

「セイラ、このあと時間はあるか？」

今日は、仕事も約束も特にないはずだ。念のため後方に控える侍女のローリとイヴをチラリと見たら、二人は微笑んで頷いてくれた。

私はメルさんに向き直つて答える。

「大丈夫です」

「そうか。俺も今日の仕事は終わったから、一緒に街へ行かないか？」

「行きます！ すぐに用意してくるので、少し待つててくださいね」

今度は即答し、慌てて踵を返した。

——邪魔が入る前に、早く城を出ないと！

これまでも、たとえわずかな時間であつても余裕ができれば、メルさんは私と過ごそうとしてくれた。だが、いい雰囲気になつたときや二人で出掛けようとしたときに限つて、来客やら書類仕事やら邪魔が入るのだ。国王というのは私が想像するよりも、ずっと多忙なのだろう。

仕事なら仕方ないと思ひ、笑顔で「頑張ってくださいね」と送り出してきたものの、内心ではとても寂しかった。ジャクリーンの様の父親であるゲインズ侯爵が呼びに来たときなどは、嫌がらせじゃないかと疑つたほどだ。

今日こそは誰かがメルさんを呼びに来る前に城を出たいが、ドレスを着たままで街で目立つてしまう。この国へ来たときの旅装のドレスなら、お忍びデートには丁度いいだろう。きっとメルさ

んも、シンプルな服に着替えてくるはずだ。

すでに自室へ向かって駆け出していた私に、後ろから苦笑まじりの声がかげられた。

「城門前で待っているから、早く来いよ。だが慌てすぎて転ぶなよ」

「はい、すぐ行きます！」

振り返ってそう答えた私は、メルさんの周りに人がいないことを確認する。

しめしめとほくそ笑むと、邪魔な裾を両手でぐいと抱え上げる。そして重いドレスもなんのその、淑女らしからぬ速さで部屋へ戻るのだった。

ローリとイヴはそんな私を追いかけてきて、着替えを手伝ってくれた。彼女たちも誘おうとしたのだが、私が口を開くよりも早く、ローリがおっとりとした口調で言った。

「私たちは、お部屋でお待ちしております」

「セイラ様は、どうぞごゆっくり陛下との時間をお楽しみになってください。城に來られてから、お二人で城外に出られるのは初めてなのですから」

そう氣遣つてくれた二人に「ありがとう。次は絶対一緒に行こうね」と言つて留守を頼み、私は護衛のホロウエイさんと一緒に城門へ急ぐ。城門ではすでに着替えを済ませたメルさんと、近衛隊長のウォーレン卿、そして副隊長のマグワイア卿の三人が待っていた。

お忍びで出掛けるため、近衛の二人も隊服は着ていない。

メルさんと過ごす時間が増えたことで、彼らと顔を合わせる機会も多くなった。

ウォーレン卿もマグワイア卿も、ホロウエイさんに会うと必ず敬礼する。つい最近まで知らな

かったのだが、ホロウエイさんは前近衛隊長であるらしい。

つまり、二人の元上官というわけだ。それならば二人の態度にも、そしてホロウエイさんの鍛え抜かれた身体と鋭い眼光にも納得できる。

今日はそんな五人で、初めてのお出掛けだ。

二人きりのデートでないのは残念だが、我儘を言える状況でないことは承知している。

「お待たせしました」

笑顔で走り寄つた私を見て、メルさんは懐かしそうに眼を細める。

「ドレスを着ていないセイラの姿を見るのは久しぶりだな」

「言われてみれば、そうですね！ 最近やつとあの重たいドレスにも慣れてきたのに、こんなに楽な格好で過ごしたら、また重く感じちゃうかもしれません」

「では、誘わない方が良かったか？」

——私の答えなんて、わかっているくせに。

ニヤリと笑っているメルさんの手を掴んでぐいっと引つ張り、私は歩き始める。

どんな意地悪を言われようと、久しぶりの外出に心が弾むのを抑えられなかった。

「うわあ、やっぱり人が多いですね」

目の前に広がる、賑やかな街並み。

人の話し声や馬の嘶きに加えて、歩道を我が物顔で走る馬車の、ガラガラという大きな車輪音が

聞こえる。

色とりどりのワンピースドレスを身に纏い、買い物を楽しんでいる女性たち。

男性たちは壁に寄り掛かり、飲み物片手に談笑している。

満面の笑みで走り回る子供たちの姿も見える。

オドロオドロしい陰謀や媚へつらいに満ちた城内とは違う、活気のある日常が目の前に広がっていた。

「何か欲しいものや見たいものはあるか？ 甘味屋に雑貨屋に芝居小屋……ここには色んな店があるぞ」

「特に買いたいものとかはないんですけど、色んなお店を覗いて冷やかしちゃいましょう」

メルさんの腕に自分の腕を絡めたまま、私は歩き出す。恋人同士ならば当たり前の行動だが、城ではする機会がないため、そんな些細なことがとても嬉しく感じた。

王都の中心を貫くメインストリートにあるたくさんのお店を、片っ端から覗いていく。

いつまでも終わる気配のないウインドウショッピングに、やがてメルさんが音を上げた。

「……セイラ。少し休憩しないか？」

「ええ？ もうですか？」

珍しく疲れた表情を見せるメルさんに、驚いて問いかける。

「どうやらこの世界の男性も、女性の買い物にとことん付き合える体力は持ち合わせていないようだ。」

「もう何も、歩き始めてからだいぶ時間が経っているぞ」

メルさんのため息まじりの言葉に首を傾げながら、後ろに控えている三人を見る。すると、彼らも疲れた顔をしていた。

「じゃあ、あそこのお店でお茶にしましょうか」

十メートルほど先に見える、今王都の女の子に人気だというカフェを指差す。

以前から、ローリやイヴと行ってみたいと話していたのだ。

「あそこ、か……待て。逃げようとするな。お前たちも一緒に来い。ホロウェイもだ」

メルさんは一瞬眉をひそめたあと、後ろの三人に声をかける。三人は、一様に引き攣った笑みを浮かべていた。

一番立ち直りが早かったマグワイア卿に先導され、私たちもカフェへ足を踏み入れる。

「うわ、可愛い……」

中に入った途端、私は思わず呟いた。女性に人気があるのも頷ける。

城に滞在しているため、高価な調度品や豪華な装飾は見慣れたものの、そういったものとはまた違った良さがあった。『女の子が生まれたら、子供部屋をこんな風にしてあげたい！』と考えてしまふくらい、お姫様チックなのだ。

物珍しくてキョロキョロ見回していると、他の女性客とやたら目が合う。どうやらかなり注目を集めているようだが、それも無理はない。

女性客がメインのこのお店に、それぞれ個性の違ったイケメンが四人も入ってきたのだから。

金髪碧眼、ワイルド系！ 男の色気全開のメルさん。

メガネが似合うこと間違いなし！ 知的な美形のウォーレン卿。

笑顔が爽やか！ 見た目はチャライが頼れる兄さん、マグワイア卿。

五十代にして肉体年齢三十歳！ 大人の魅力溢れるホロウエイさん。

……なんて心の中で勝手にキヤッチフレーズを付けながら、彼らに目を向ける。

私とマグワイア卿はまだいいが、残りの三人は、はつきり言っただけで浮いている。

そういえば、以前スクレという甘味の屋台に並ぼうとしたとき、メルさんが「似合わないから」と躊躇していたっけ。

このお店を選んだのは失敗だったかなあ。でも次はいつ城下に来られるかわかんないし……みんなごめんね。

そう心の中で謝りながらも、私は彼らと一緒に可愛らしいピンク色のテーブルを囲んだ。

このお店はインテリアだけでなく、お茶にもきちんとかかわっているようで、運ばれてきたお茶からは、とても芳醇な香りがした。

その香りを楽しみながらお茶を飲んでいると、周りの女性客の声が入ってくる。

「あの五人、どういう関係？」

「四股だったりして〜！ 男好きな女ね」

確かに事情を知らない人が見たら、不思議な五人組ですよねえ。

私はうんうんと頷きながら、お茶をいただく。

正直、この程度の嫉妬や嫌味は何とも思わない。セフィラードの城に来てから、嫌というほど経験したからだ。

「セイラ様……遅しくなりましたなあ」

久しぶりに会った親戚のおじさんみたいに、しみじみと呟くホロウエイさん。

のんびりとお茶をすすっている私なんかよりずっと周囲を警戒している彼らには、当然、彼女たちの声も聞こえたのだろう。

「まあ、言われるだけなら実害はありませんしね。それにもっと強くなると、メルさんの横に並ぶことなんてできないじゃないですか」

そう言っただけで、メルさんがクスリと笑った。

「ところでセイラは、いつも買い物にこれだけの時間をかけるのか？」

今度は呆れたように肩を竦めてみせるメルさん。その少しおどけた仕草を見て私も笑う。

「今日は見ているだけです。それほど時間をかけているつもりはないです。実際に購入するとき、もっと時間をかけて吟味しますよ」

「……欲しいものがあるときは、侍女と行くといい。ホロウエイを連れていけば安全だ」

私から目を逸らしながら言ったメルさんを、ホロウエイさんがジトリと恨めしそうに見つめる。メルさんはその何か言いたげな彼の視線を避けるように、何食わぬ顔で窓の外を眺めている。

そこで、マグワイア卿が口を挟む。

「買い物ときは、女性の方が元気だよねえ」

「なんだか慣れてる感じですねえ。マグワイア卿はよく女性と買い物に行かれるんですか？」

激務の中、よくそんな時間があるもんだと感心しながら尋ねた。

「いやあ、どうだろうねえ。隊長が訓練の鬼だから、なかなかお休みくれないのよ。セイラちゃんからも、もっと休みを増やせて言ってくれない？」

マグワイア卿は、そう言っただけでぐらかした。別に隠すこともないだろうに。

さらっと鬼呼ばわりされたウォーレン卿だったが、ポーカーフェイスを崩すことなく、優雅にお茶を飲んでた。

そんな二人を苦笑しながら見守っているホロウエイさんを見て、私はあることを思い出す。

「そういえば、ホロウエイさんは近衛隊の隊長をなさっていたんですよね？」

「随分とおしゃべりな人がいたもんですね」

少し困ったように言うホロウエイさん。

「あ、えーと、聞いちゃまずかったですか？」

「いえ……もうずっと昔のことですが、サイラス陛下のお父上の近衛隊長を務めさせていただきました。とはいえ、今では一介の老人に過ぎません。一時的にセイラ様の護衛を拝命しておりますが、それもいずれ解かれるでしょう」

思わぬ言葉を耳にして、私は驚く。

「解かれるって、どうしてですか？ せっかくホロウエイさんとも、こうして仲良くお話しできる

ようになったのに……このままではいけないんでしょうか？」

ホロウエイさんを護衛に任命したメルさんは、渋い表情を浮かべたまま黙っている。

気まずい雰囲気を作ったのは、マグワイア卿だった。

「セイラちゃんの気持ちもわかるけど、それはちよつと問題があるかなあ」

「問題、ですか？」

「セイラちゃん……いえ、セイラ様は、陛下と結婚して王妃になられるんですよね？」

周りに聞かれないよう、声量を落としたマグワイア卿。珍しく真剣な表情を見せる彼の言葉に、私はじつと耳を傾ける。

「国王陛下、王妃陛下、王太子殿下には、それぞれ専属の軍隊——つまり近衛隊がつきます。セイラ様が王妃になられたら、それ以外の人間が警護につくことはできません。いくらホロウエイ様が元近衛隊長であってもです。……まあ、ホロウエイ様が近衛隊に戻って来てくださるというなら、話は別ですが」

マグワイア卿は少し間を空けて、悪戯っぽく付け加えた。だが当のホロウエイさんは、苦しい表情を浮かべている。

「……近衛隊に戻るつもりはない。お前たちにも、今なら理解できるんじゃないか？ 私の思いが」

静かな、だが断固たる決意が感じられるその言葉を聞き、マグワイア卿は表情を曇らせた。そしてホロウエイさんと数秒視線を交えたあと、「申し訳ありませんでした」と言っただけで頭を下げる。

——え？ 何？ 全く意味がわからないんですけど？

なんか目で会話してたよね、今。メルさんもウォーレン卿も、その意味を理解している感じだし……って、状況が全くわかってないのは私だけ？

誰か説明してくれないかなと思つて四人の顔を順番に見てみたけれど、誰も口を開く様子はない。ここで「えー、わかんない。私にもわかるようにちゃんと説明してよー」なんて言えるほど、神経太くありませんから！ むしろ空気を読んで、話題を変えちゃうタイプですから！ 本音を言えば、すごく気になる。

でも重苦しい雰囲気になんか耐えかね、私はやっぱり話題を変えることにした。

「え、と。ここのお茶、美味しいですね。お土産としても買えるみたいですし、買って帰りましょうか？」

わざとらしいなあ、なんて思いながらもそう言ってみる。

驚いたことに、すぐに話を合わせてくれたのはウォーレン卿だった。

「そうですね。陛下も気に入られた様子ですし、買って帰りましょうか？」

「クレイグにも一つ買って帰るか。リラックス効果とストレスを軽減する効果があるらしいぞ」

メルさんが冗談っぽく言った。クレイグとは、宰相様のことだ。ウォーレン卿が、真剣な顔で頷く。「一つと言わず、毎月城に卸してもらおうよう、契約しておきましょう」

そんなやり取りのおかげで、やっと和やかな雰囲気に戻った。そして皆でワイワイと話をすると数十分。私は店を出る前にトイレに行つておこうと思ひ、メルさんにだけそつと伝えて席を立つ。

普段ならローリやイヴについてきてもらうが、今日はいない。一人で行こうとしたらホロウエイさんがついて来たため、「大丈夫なので、ここにいてください」と慌てて押しとどめた。

「しかし、お一人にするわけには——」

「大丈夫ですから、絶対について来ないでください！」

真つ赤な顔で逃げるように席を離れた私の耳に、メルさんのくつくつという笑い声が聞こえた。

全くもう……

その後、何事もなくトイレを済ませた私。

だがみんなの待つ席へ戻ろうとしたら、二人の男性に行く手を遮られた。どことなく下品な感じのする。元の世界の言葉で言えば……そう、チンピラだ。

「彼女一人？ お茶しない？」

「馬鹿！ ここはカフェなんだから、お茶してる最中に決まってんじゃないか！ またお茶に誘つてどうすんだよ」

「あ、ホントだ」

「お腹チャポチャポになるっつーの」

そう言つて、ぎやははははと笑い合う男たち。

なんだこのノリは？ まさか漫才師……じゃないよね？

「えー、じゃあどう誘つたらいいんだ？」

「イイことしようぜ、とか？」

「おおー、お前天才じゃね？」

ええっ!? 言い過ぎでしょ。それなら世の中天才だらけだったの!

「最近できたあの店は? なんだっけ?」

「あー店じゃねえよ、確か庭園だよ……つてなわけで、暇なら俺たちと庭園行かない?」

「そうそう、楽しいらしいよー」

いやいやいや……そんなこと言ってるけど、最終目的は『イイこと』なんですよ。バレちゃってますよ? それに行くなら恋人スエムさんと行きますから!

馬鹿もここまで突き抜けてると、残念としか言いようがない。

呆れや怒りを通り越し、哀れみの表情を浮かべてしまう。

「あの、すみません。店内に同行者がおりますので」

「マジ? その娘こ可愛い? 二対二で丁度いいじゃん!」

「ラッキー!」

男たちはハイタッチして、やけに喜んでいる。

「全員男性です」

その私の言葉に、彼らはおつくりと肩を落とす。

「ええー、じゃあやつぱりお姉さんだけでいいや」

「野郎どもはここに残しといて、俺たちと遊ぼうよ」

切り替えが早い。早すぎる。城の貴族よりも早い。これは彼らの唯一の長所かもしれないぞ!

「いえ、結構です。私が戻るのを待っていると思うので……どいていただけます?」

「そんなつれないこと言っちゃ駄目だつて。じゃあデートは諦めるからさあ。お姉さん、お金欲しくない? いいお仕事紹介するよ?」

……ナンパにしろ、スカウトにしろ、才能ないよこの人たち。

「すみません。時間がありませんので」

通路を塞ふさぐように立っている彼らと壁の間隙すきまを強引にすり抜けようとしたのだが、すぐに阻はまれてしまった。

「そんなこと言わないでさあ。……俺たちだつて忙しいのよ?」

「そうそう、黙ってついてきた方がいいと思うよ?」

彼らのセリフが、だんだん脅迫めいたものになってきた。

「お忙しいなら、他の人を当たられた方が早いと思いますよ」

「だつて、黒髪で黒目の子がいいつてお客さんが言うからさあ」

「おい、馬鹿!」

「え? あ!! いっけね。聞いちゃった? 聞いちゃったよね?」

そう言いながら、一人の男が私の腕を掴つかむ。

「聞かれたからには、逃がすわけにはいかないな」

いや、とつづくにバレバレでしたよ?

とは思っても口には出さない。さすがに、これはヤバイ状況かも。



とりあえず、メルさんを呼ぼうか……と考えていると、男に腕を引っ張られる。馬鹿丸出しでも、男は男。私が力で敵うわけがなく、半ば引き摺られるようにして歩く。

「ちよ、ちよっと止めてくださっ、メッ——」

私が焦って声を上げると同時に、前を歩いていた男が勢いよく横に吹っ飛んでいった。鈍い音を立てて壁に衝突した男はそのまま床に転がる。起き上がる気配はない。衝撃で気を失ったのだろう。

驚き固まっている私の隣で、直前まで私の腕を掴んでいた男が情けない声を上げる。

「いってー！ 痛てえって。痛たたたた！」

慌てて横を見ると、眉間にしわを寄せたメルさんが男の腕をねじり上げていた。

男は涙目になりながらも、何とか逃れようと暴れている。

「お前、彼女に何をしてるんだ？」

メルさんが低い声で、ゆっくりと男に尋ねた。

「何って、ちよっと話をしてただけ……って、痛たたたた！」

「ほう。俺には腕を掴んで引き摺っているように見えたが？」

「ちよ、っと待って！ 誤解だから——」

必死で言い訳する男から視線を外し、メルさんはチラリと私を見る。

(嘘です。嘘)

私は声を出さずに口をバクバクとさせた。

唇の動きを読み取つたらしいメルさんは、未だ言い訳を続ける男を蹴り飛ばす。男は相棒の上に十字に重なり、二人で仲良く眠ることになった。

ふと顔を上げた私は、メルさんの背後に他の三人が立っているのに気付いた。やりすぎだと言わんばかりの呆れた表情を浮かべたウォーレン卿が口を開く。

「……サイラス様、もうその辺になさってください。あとは我々にお任せを。ヘイズ、この男たちを近くの詰所まで連れていきなさい」

「はいはい。了解っと」

床に伸びている二人を、どこで調達してきたのかわからない縄で手際よく縛り上げるマグワイア卿。涼しい顔で成人男性二人をズルズルと引き摺っていく彼の背中を見送っていたら、メルさんに声をかけられた。

「セイラ、何もされていないな？」

強引に店外へ連れ出されそうになったが、それだけだ。

「おかげさまで……」

しかし、男たちの会話があまりに間抜けだったからなのか、それとももっと怖い経験をしたからなのか、さほど恐怖を感じなかったことは驚きだ。

以前の私なら、腕を掴まれた時点で足が竦み、とても声など出せなかっただろう。

まあ今回は、すぐ傍に屈強な男性が四人もいたので安心しきっていたのかもしれないが。

「おかげさまで……でも何だったんでしょう。あの人たち」

「おそらく、人攫いの下っ端だろうな」

「え？ 人攫い？ いかかわしいお店の勧誘とかじゃなくて？」

てつきりナンパか、娼館とかのスカウトかと思っていた。まさか、人攫いだったとは！

それを聞いて、ほんの少し恐怖心が芽生えた。もしメルさんたちが来てくれなければ……と思うとぞつとする。

「昔に比べたら随分と治安が良くなったが、まだまだあいつ輩もいるからな」

浮かない表情で、そう呟くメルさん。きつと、民のことを心配しているのだろう。

「昔はもっと多かったですか？」

「ああ。城が荒れて、憲兵も機能していなかったからな」

自嘲気味に口の端を吊り上げたメルさんを見て、それがいつのことなのか大体想像できた。おそらくメルさんのご両親が亡くなり、まだ幼かったメルさんが即位したばかりの頃だと思う。

「さっきの奴らは、まだ慣れてないんだろう。こんな真つ昼間の店内でやる馬鹿は初めて見た。大抵は奥まった路地で、ガツンと一発殴り、気絶させてから攫うものだ」

まるで経験があるかのような言い方だった。

「もしかして、メルさんも攫われかけたことがあるんですか？」

「男の俺を攫ってどうする。連れ去られそうな女子供を何人か見たんだ」

「その人たちは、どうなったんですか？」

私の質問に、少し表情を曇らせるメルさん。もしかして……と最悪の事態を想像したが、メルさ

んは私を安心させるように微笑んだ。

「……俺が助けたから心配するな」

私はその言葉にほっとする。

「当時はよく城を抜け出して、街を徘徊していたからな。目についた者は皆助けた」

何人もの人を助けたことを誇るでもなく、淡々と語るメルさん。その横顔からは、少しの後悔が窺えた。きつと全員助けられなかったことが悔しいのだろう。

その思いをいくらかでも和らげることができたらと思ひ、私は口を開く。

「攫われそうな女性を助けるなんて、物語に出てくるヒーローみたいですね。助けてくれたメルさんに恋心を抱いた女性もいるんじゃないですか？」

「……どうだろうな。英雄になりたいと思つたことはないが、お前にそう言ってもらえるのは悪くない」

そう言つて目を細めると、メルさんは私の手を取り指先にキスを落とす。その芝居がかつた仕草に、思わずキュンとしてしまう。

「残念ながら、陛下にはヒーローらしい爽やかさが欠けておりますがな」

私たちの間に漂い出した甘い雰囲気の水を差すように、ホロウエイさんがボソリと呟いた。

「確かに陛下には悪役……それもさっきの男たちみたいなチンピラより、親玉の方が似合いそうですね」

普段はこういった話にあまり加わらないウォーレン卿まで、そんなことを言い出した。

言われてみれば……と私も納得しかけたことは言わないでおこう。

当のメルさんはいえ、どこ吹く風といった様子だ。

「メルさん、良いんですか？ ホロウエイさんたちに言われればなしで」

「ん？ ああ。事実だからな」

——認めちゃったよ。

「俺はお前や、この国を守らなければならぬ。多少は狡猾な部分もないと、大切なものは守れん。物語の英雄は、博愛主義者だろう？ だが俺は、俺が大切だと思ふモノしか守らない」

そう言つて優しく微笑むメルさんは、なんだかいつもより大きく見えた。

彼の言う大切なモノには、私が想像するよりもずっとたくさんモノが含まれるんだろう。そう思うと、自然に笑みがこぼれた。

「さてと。いつまでもここには、店の迷惑になる。マグワイアを拾つて城へ戻ろう。少し時間をくつてしまったから、この続きはまた後日だな」

言いながら、私の肩を抱くメルさん。

「そうですね、次のデートを楽しみにしておきます」

そしてメルさんに促されるまま、店の出口に向かって歩き出したのだが、ふと何人も視線を感じる。

男たちが壁や床にぶつかつたときの衝突音を聞き、また男たちを引き摺っていくマグワイア卿を見て何事かと思つたのだろう。店中の客が私たちに好奇心丸出しの視線を向けていた。幾人かは席

を立ち、近くまで見に来ていたようだ。

「あの……お店の方に——」

「今ウォーレンが対応しているから心配するな。このまま帰ったりはしない」
振り返ると、ウォーレン卿が店主と思しき女性に何やら重そうな革袋を差し出している。店を壊してはいないが騒がせてしまったので、心付けを渡しているのだろう。

うーん。お金の力は偉大だ。

「是非またご来店ください。お待ちしております」

店主はそう言って、満面の笑みで見送ってくれた。

店を出て歩いていたら、メルさんが口を開いた。

「これで、またここに来てお嫌な顔はされないな」

「そんなことまで考えてお金を渡したんですか？」

メルさんは、それほどこのお店を気に入ったのかな？

「セイラはあの店が気に入ったんだろう？ また侍女たちと来たらいい」

「あ……ありがとうございます」

自分のためじゃなくて、私のためにしてくれたんだ。彼の優しさに触れて、胸がキュンとする。そんな会話をしながら歩いていると、男たちを詰所に引き渡して来たらしいマグワイア卿が合流した。

「ご苦労だったな」

そう言うメルさんに軽く頭を下げたあと、彼は私に向かって静かに言う。

「セイラ様、危なかつたですよ。今回は馬鹿な奴らだったので助かりましたが、せめて叫ぶとか、逃げるとかしてくだらないと」

優しく諭され、私は素直に謝った。

「はい、すみません。まさか人攫いだとは思わなくて」

「次からは気を付けてください。攫われちゃったら大変ですよ？ ……あんなこととか、こんなことかされますからね」

にんまりと笑い、両手をワキワキと動かすマグワイア卿。その姿はまるでセクハラ親父だ。

そんなマグワイア卿の無駄に整った顔を私が残念な思いで見つめていると、ウォーレン卿が彼の頭に拳骨を落とした。

さらにメルさんも、彼に小さく蹴りを入れる。

「その手つきはやめろ。セイラに変なことを想像させるんじゃない」

「陛下、それに隊長も！ ひどいですよ！ 俺はセイラ様に、人攫いの恐ろしさを知っていただとうと——」

もはやじゃれ合っているようにしか見えない三人を、私の背後に立つホロウエイさんが笑みを浮かべて眺めている。

——ああ、平和だな。

城に向かって歩きながら、一人幸せを噛み締める私。

平穏な日々がどれほどありがたいものなのか、身をもって知った。

赤く染まりつつある夕暮れの空を見上げていると、メルさんがスッと私の視界に入る。そして、優しく私を見下ろした。

「どうした？」

「何でもありませんよ」

そう言って笑みを浮かべた私に、メルさんもふんわりと微笑して見せる。その穏やかな表情から、彼がとてもリラックスしていることが窺えた。

メルさんが最も信頼している三人の部下。彼らの前でなら、『陛下』でなくただの『メル』になれるのだろう。

また、みんなで来たらいいな。

次はローリやイヴも一緒に。できれば宰相様も参加してくれたら、ホロウェイさんもより楽しめるはず。宰相様のファンであるローリも喜ぶに違いない。また機会があれば誘ってみよう。

そう心に誓い、満ち足りた気持ちで城に帰還したのだが……城門の前で私たちを待っていたのは、般若だった。その般若——宰相様に、早速とつかまるメルさん。

宰相様はカッカカッと靴音を鳴らし、齡七十のご老体とは到底思えぬ速さで私たちの目の前に移動してきた。

「陛下、どこに行かれていたのですかな？ 本日分の政務は終わっていても、しなければならぬ

ことが他にも山のようにあるはずでは？ ん？」

言葉は丁寧だが、表情が伴っていない。激しくミスマッチだ。

「仕方がない……セイラ、また夜に」

観念したらしいメルさんはそう言い残すと、一人執務室へと向かう。

すると宰相様は、すぐさまターゲットを変えた。

「ウォーレン、お前がついていながら陛下をお止めしないとは……それどころか一緒になって遊んでいてどうするのだ。陛下にとつても我々にとつても、それにセイラ様にとつても、今がとても大事な時期だと理解しておるのか？」

「申し訳ございません」

素直に頭を下げたウォーレン卿。そのおかげか、もしくは彼の日頃の行いのおかげか、宰相様はあっさりと彼を解放する。

「わかっておるのならよい。早く陛下を追いかけのじや、行け」

「失礼致します」

宰相様に雷を落とされても表情一つ変えないウォーレン卿は、さすがと言うしかなく。彼はもう一度軽く頭を下げると、足早にメルさんを追いかける。

「……じゃあ、俺も」

そう言って、そーっとその場を離れようとしたマグワイア卿だが、宰相様に襟元をむんずと掴まれ、「お前は、私と一緒に来い！」と引き摺られていった。

その場に残されたホロウェイさんと私は、二人で顔を見合わせ、急いで部屋に戻るのだった。

2 戴冠式の招待状

「ふう……」

私の耳に、大きなため息が聞こえた。

ため息の主はメルさんだ。今は私の部屋で二人きり。いくら寛いでいるとはいえ、彼がこれほど疲れを露わにすることは珍しいので、私は少し心配になってしまふ。

「メルさん、大丈夫ですか？ 最近すごく疲れてるみたいですけど……」

「通常の政務に加えて、俺が体調を崩している間に滞っていた仕事があるものでな。クレイグと二人がかりで処理しているが、隣国の件もあつて何かと忙しい」

メルさんの話では、ブランシヤールがようやく戴冠式に向けて動き始めたようだ。

大公と王位を争っていたレオンハルト王太子は、メルさんの支援によって戦争に勝利した。今後ブランシヤールはセフィラードの属国になるため、メルさんとレオンハルト殿下は何度も手紙をやり取りしているらしい。

綺麗に整えられていた髪を手で崩しながら、凝りをほぐすように首を回しているメルさん。

「私にも手伝えることはありませんか？」

とはいえ、まだ王妃ではない私に手伝えることなど限られている。その程度の仕事なら、宰相様の部下や、ウォーレン卿たちがすでにやっているだろう。

わかっているけど、疲れた表情のメルさんを見たら、言わずにはいられなかった。

「いや……それよりも少し休みたい。最近あまり寝ていないんだ。ベッド……いや、そのカウチでいいから横にならせてくれ」

メルさんはそう言つて、脱いだ上着を無造作にベッドに放り投げる。

「もう。しわになりますよ」

私は脱ぎ捨てられた上着を拾い上げ、ハンガーに掛けた。

「セイラ、膝を貸してくれないか？」

メルさんからそう頼まれ、私は彼の横に座り、「どうぞ」とばかりに膝をぼんぼんと叩いて見せる。

メルさんは私の膝に頭を載せると、すぐに目を閉じてしまった。

膝に、メルさんの重みと温もりを感じる。

長い睫が縁取る目元は、こうして閉じているいつもの鋭さがなく、ただ美しい。私は彼の乱れた髪の毛を梳きながら、そつと声をかける。聞こえていなくても別に構わなかった。

「少しの間ですけど、ゆっくり休んでください。お疲れ様でした」

そしてメルさんの手を取り、そつとキスを落とす。すると彼の瞳が、ゆっくりと開く。メルさんは私が握っている手の指先で、私の頬を優しく撫でた。

「……全く。俺が我慢しているというのに、お前は関係なく煽るんだからな」
そう呟いたメルさんの瞳は、熱を孕んでいた。

不意に膝から重みと温もりが消え、視界がグルリと反転する。

気が付いたときには、カウチに押し倒されていた。

「メ、メルさん、眠った方が——」

「黙れ。俺を煽ったお前が悪い」

ドレスの紐を乱暴に解かれる。メルさんはドレスを脱がし、カウチの下に無造作に落とした。疲れているためか、いつもより欲情しているらしいメルさんの表情は、壮絶に色っぽかった。

噛みつくような、激しいキスをされる。思わず漏らした吐息まで、奪われてしまった。そんな口づけとは対照的に優しい指先で、うなじをそつと撫でられ、ソクリとする。

そうして一旦解放されたときには、もう身体に力が入らなかった。

自分の唇をペロリと舐めたメルさんは、そんな私の様子を見てニヤリと笑ったあと、自分のシャツを脱ぎ捨てたのだった。

散々メルさんに啼かされたあと、遅めの夕食を部屋まで運んでもらい、二人で取ることにした。会話は自然とさっきの続き——つまり仕事の話題となる。

「そういえば、メルさんと宰相様で溜まった仕事をしるって言ってましたけど……宰相様はちゃんと休めているんですか？」

宰相様よりもずっと若く、人一倍体力のあるメルさんですら疲れたと言うほどの激務なのだ。七十歳のご老体にはきついのはと、少し心配になる。

「どうだろうな。いちいちそこまで確認しないから何とも言えん。まあ態度には出さないが、あまり寝ていないだろうな」

「やっぱり……」

「近頃、いつにも増して気が短い。おそらく疲れて気が立っているんだろう……そのせいか、財務官たちの顔色もひどいことになっている」

財務部のみんなが宰相様に雷を落とされている光景を思い浮かべ、私は苦笑いした。

「あまりにパワフルなのでついつい忘れがちですけど、ご高齢ですもんね。補佐をしてくれるような方はいらっしやらないんですか？」

以前、私が一時的に就いた役職が『宰相補佐官』だったことを思い出す。臨時でない、本物の補佐官はいないのだろうか？

「……いることはいるんだが、まだまだクレイグの足元にも及ばない。だからもう少し、クレイグには現役で頑張ってもらいたいところなんだがな」

「ところで、宰相職も世襲なんですか？」

もし爵位と同じく世襲ならば、宰相様の息子——つまりフローレス様のお父さんが、次期宰相となるはずだ。

「宰相は世襲じゃないぞ。もし世襲なら、クレイグの後任はティラール伯爵になるだろう？ それ

では役不足だ。仕事ができない者に任せることはできんからな」

「ティラー伯爵って、仕事できないんですか？」

顔を知らない人物だが、仕事の鬼と名高い宰相様の息子であり、あの穏やかなフローレス様の父親だということで、心根が美しく仕事のできるおじ様を想像していただけど……

「ゲインズやレンスター、クリードに比べたらマシだがな」

「ゲインズ侯爵はわかりますけど、レンスターとクリードって誰でしたっけ？」

「全くお前は……あの女狐たちの父親だ。レンスター伯爵がブリジット、クリード伯爵がソフィアの父親だ」

ジャクリン様以外の二人は、彼女の取り巻きとしか思っていないので覚えていなかった。おそらく宰相様の孫だと知らなかったら、フローレス様の名字も覚えていなかっただろう。

「ああ……確かそんな名前だったような気がします」

曖昧に頷く私を見て、メルさんは呆れ顔をする。

「とにかく、ティラー伯爵の仕事ぶりは彼らに比べたら多少マシな程度だ。本人は最近、少し勘違いしているようだが」

「勘違いですか？」

「侯爵家の嫡男で、父親は名宰相。家柄も問題なく、娘の器量も悪くない。そして国王は未だに独身。ここまで条件が揃えば、『次期国王の外戚に！』と欲を出しても不思議じゃない」

「そう言われてみれば、フローレス様って王妃に相応しいと言えば相応しいですよ。ジャクリン

様に劣っている点も、特になさそうですし……」

優しすぎる性格は、王妃に向かないかもしれないが。

「まあな。だがジャクリンが王妃候補筆頭であったのだから、ティラーよりもゲインズの方が、そういった面での手腕は上だったようだ」

確かに、ジャクリン様が貴族の間で王妃候補の筆頭と言われていたということは、ティラー

伯爵はある意味ゲインズ侯爵との競争に負けたことになる。

「ま、手腕だけでなく、当主ではないということも多少影響しただろうがな」

「どういうことですか？」

「ゲインズは侯爵家の当主だが、トラフ・ティラーは違う。クレイグ侯爵家の当主はユージン・クレイグ——宰相だ。トラフは嫡男だが、クレイグが死ぬまで当主にはなり得ない。よってクレイグが賛同しない限り、好き勝手には動けないということだ」

それはつまり、宰相様は孫娘のフローレス様を王妃候補にしようと、積極的に動きはしなかったということだよな？

だっていくらゲインズ侯爵がやり手だとしても、宰相様が本気で動けば負けるはずないと思うし……

「宰相様は、フローレス様をメルさんのお嫁さん候補にはしたくなかったということですよ。メルさんのことを良く知る宰相様が、孫娘を彼のお嫁さん候補にしたがらなかったのには、何か意味が？ いくら王とはいえ、こんなDSな俺様に嫁がせるのは嫌だったとか？」

食べる手を止めて考え込む私を、メルさんはジトリと睨む。

「何か、失礼なことを考えていないか」

「いえ……」

「クレイグがフロレスを推挙しなかったのは、俺が『結婚相手ぐらい自分で見つける。宛がわれた妻などいらない』と常々言っていたからだ。俺がその考えを曲げないことも、クレイグはわかっていただろう。長い付き合いだから……」

「あ、ああ、そうですね。やだなあ、わかっちゃいましたよ……」

冷や汗をかきながらさげすまなく食事を再開した私を、メルさんは訝しげに見つめたあと話を続けた。

「フロレスがはじめ王妃候補でなかったのは、クレイグの反対とゲインズの妨害があったためだろうな。まあそのあとセイラの話し相手という名目で、強引に潜り込ませてきたが」

「宰相様、そのときは反対しなかったんですかねえ？」

「単なる話し相手なら……と思っただろうか？」

「クレイグには、相談すんなかったそうさ」

「えっ？ そんな勝手なことをして、宰相様は怒ってらっしゃらないんですか？」

私は今でも、あの般若の形相が忘れられない。夢に見ることもあるほどに。

そんな宰相様を無視するとは……ティラール伯爵、悔りがたし。

「呆れてはいたようだがな。クレイグにはすでにセイラのことを『婚約者』だと話していたことも

あって、放っておいたみたいだ。自分の孫がセイラの良き友人になれば、とでも思ったのかもしれん。だが今ではそれを悔いていると漏らしていた」

確かにフロレス様となら、良いお友達になれそうさ。だが、それを後悔しているというのはどういうことなのだろう。

「……どうですか？」

「彼女たちは今、獄に繋がれてこそいないが囚われの身だ。外出できないばかりか、外部との接触も認められていない」

「つまりあのとき反対していれば、フロレス様がこのような騒ぎに巻き込まれることもなかった、ということですか」

「そうだ。彼女たちは犯人が捕まるまで、ずっと囚われたままだからな」

黒幕以外の人には申し訳ないが、今はあそこにいた方が安全なのかもしれない。命を狙われているのが、私だけとは限らないのだから……

「そういえば……あの男は何か白状したんですか？」

「暗殺者か……さすがはプロと云ったところか、全く口を割らないそうさ」

「参ったというように、肩を竦めて見せるメルさん。」

「ゲインズ侯爵とティラール伯爵。その二人については何となくわかりましたが、残る二人はどんな方なんですか？」

「一言で表すなら、どちらもゲインズの『駒』だな。といっても仲が良いのは上辺だけで、三人と

も、あわよくば互いの足を引っ張ってやろうと考えている」

そう言ったメルさんの表情は苦々しい。

「レンスター家は、この国で最も古い家柄の一つで、元々は神職者の家系だ。今はそれほど発言力はないものの、教会が権勢を振るっていた時代なら大貴族だな。セイラの住んでいた村にも教会があっただろう。あれもその時代の名残だ」

私は村にあった教会を思い出す。確か村長も、「教会主様が——」とか言っていたなあ。神職者とは、そう言った人たちのことだろう。

ブランシャールにも教会があったということは、その宗教は大陸全土に浸透していたと思われる。確かに現存したならば、大勢力と言っているはずだ。

「クリード家は軍人の家系で、代々優れた武人を輩出している。そのためか、娘よりも息子が生まれた方が喜ばれるみたいだな。だがソフィアの場合は、俺の愛妾候補として大切に育てられたようだ」

軍人の家系だと教えられ、思わず納得した。気性の荒いソフィア様は、もし男だったらいかにも武人に向いていそうだ。『女である以上武人にはなれない。ならば愛妾として家族の期待に応えなければ!』とでも考えているのかもしれない。

……それにしても驚いた。まるで報告書を読み上げるように、澀みなく話すメルさん。もしや全ての貴族の情報が、頭に入っているのだろうか？

「話を聞いても、誰が黒幕だか見当が付きませんね」

「それに、黒幕が一人とも限らない。二人、三人で共謀している可能性もある。セイラを排除するため、一時的に手を組んでいることも考えられるからな」

メルさんは眉間にしわを寄せながら、ゆっくりとワインを飲む。それを見て、ようやく食事中であつたことを思い出した。

私は知らず知らずのうちに止めていた手を再び動かし、少し冷めてしまった料理を口に運ぶ。

そして冷めても美味しい料理を咀嚼しながら、解決の糸口が見えないことを憂鬱に思うのだった。



何の変化もないまま、数日が経過したある日。

珍しくまだ日が高い時間に私の部屋へやって来たメルさんが、開口一番、嬉しそうにこう言った。「セイラ! ブランシャールの戴冠式の日が決まったぞ」

私が以前暮らしていた国、ブランシャール。

その新国王が誕生する日が、ついに来たのだ。

「結構時間がかかりましたね。ブランシャールはずっと国王がいない状態でしたし、内乱が終わったら、すぐに即位するんだと思っていました」

すでに、終戦から八ヶ月ほど経つ。早いものだ。

「今回は戴冠と同時にセフィアードの属国となることを宣言しなければならぬからな。その準備

に時間がかかったんだらう……それに、北部の荒れ具合もひどかったしな」

その言葉で、メルさんとセフィアードにやって来る道中で見た、ブランシヤール北部の街を思い出す。大公の悪政のせいで荒れ果てた大地。やせ衰え、表情を失った人々。

「王太子はあの地を復興させるべく、心血を注いだらしい。自分が王位に就くのは、民の生活が元に戻ってからだと決めていたのかもしれないな」

レオンハルト王太子殿下は、民から絶大な人気があった。確かに自身のことよりも国のこと、民のことを優先しそうだ。

「そうですか……みんなに笑顔が戻っているといいですね」

「気になるか？ それならセイラ自身の目で確かめるといい」

「は？」

思わず間抜けな返事をしてしまった。

「は？ じゃない。ブランシヤールはセフィアードの属国になるんだから、俺は戴冠式に出席しなければならぬ。そして俺が、お前を城に残して行くわけがないだろう」

「ええっ!? 私と一緒に行くんですか？ それはちよつと……」

戴冠式には、セフィアードの貴族たちも出席するはず。彼らは私のことを、ブランシヤールの貴族だと思っている。けれど実際には私は貴族でも何でもないし、ブランシヤールの貴族に知り合いもない。そんな私が戴冠式に出席したら、貴族でないとバレてしまうのではないだろうか？

まあ、私は自分が貴族だなんて一言も言っていないんだけど、バレて身分を調べられるようなこ

とになったらまずい。

「二十日後に発つ。お前が考えていることは大体わかるが、心配するな」

口の端をクツと吊り上げたメルさんを見て、一抹の不安を覚える。

なんか、メルさんが楽しそうなきつて、ろくなことないんだよねえ。

「随分と愉しそうですね？」

「ああ。やつとお前を王妃にできるのだからな」

今度は意味ありげにニヤリと笑うメルさん。

「……どういう意味か、聞いてもいいですか？」

あのとき——メルさんの正体を知らされたときのようなだまし討ちは二度とごめんだ。

「あちらに着いたらな」

「今、教えてください」

「俺は仕事を抜け出して来たんだ。これ以上ここにいと、また角を生やしたクレイグが現れるかもしれないぞ？」

その言葉を聞いた途端に黙り込んだ私を見て、メルさんは愉しそうに笑いながら出て行ってしまう。

ここで宰相様の名前を出すなんて、卑怯です！

二度とお目に掛かりたくない般若顔の宰相様を思い出して、それ以上追及することは躊躇われた。パターンと閉じる扉を恨めしく見つめる。